

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

橘女子大学における教育実践事例

森田 富喜子

(橘女子大学)

1. はじめに

この事例報告は、本年4月27～28日、広島において開催された「第11回全国研究集会」に報告したものを基にしています。この研究集会では、「大学生活における図書館」をテーマに、利用問題をより具体的にするために、大学における教育と学生の問題についてを多角的に捉えるということを目的としました。この報告は、その中でまず、図書館員自らの手で、大学において教育はどのようなにされているか(大学教員がいかに努力、工夫しているか)を知り、教育研究機関の「心臓」である図書館は何をなすべきかを知るための一例としてまとめたものです。

具体的な事例報告の前に本学のガイドラインを紹介します。

本学は約1,200名余の学生、40人足らずの専任教員、30人足らずの職員で構成された小規模大学です。創立20年にも足らない、英語英文学科、国文学科、歴史学科の三学科のみを有する文学部のみ女子大学です。

図書館は蔵書冊数約6万、年間資料費2,400

万程、4人の専任職員とアルバイト1名、年間学生1人当りの平均貸出冊数8.4冊といった図書館です。

この報告を作成するにあたっては、同志社大学図書館の竹本氏の調査方法を、形式・内容ともに全面的に活用させていただきました。面接項目については、以下の通りです。

1) 何故聞きにきたか

- i) 大図研とは何か
- ii) テーマの説明
- iii) 科学者会議編「大学における教育実践」の紹介 — 読んでいるかどうか確認

2) 質問項目

- i) 持ち授業をまず全部聞き出す。
 - 一般教育かどうか(登録者数, 出席者数)
 - 専門かどうか (" ")
 - 演習かどうか (" ")
- ii) 一般教育について
 - 専門の講義とどう違うか。
 - 何を目標にしているか(具体的に)
 - 学生の反応はどうか
 - やりがいがあるかどうか
 - マスプロ講義についてどう思うか
- iii) 専門について

一方通行か、質問の時間はとっているか。
力をつける目的をもっているか。
マスプロ講義で目的は達せられるのか。

IV) 演習(ゼミ)について

学生は自発的に質問をするか。

〃 討論に参加するか。

〃 勉強、読書をするか。

(以上の3質問で、学生の本の読み方、専門分野の力量、又教員が学生の自発性を引き出すためにどんな努力をしているか話してくれる。核心にふれなければ、ズバリ聞く、卒論作成の指導をしているか、ゼミ合宿その他制度にはないことを教師が自発的にもっているかどうか。)

V) 以上の実践のなかで、研究者としての悩みは何か。

VI) 図書館への要望はないか。

学生との関連で(本は揃っているか etc, 研究者個人としての図書館への不満、要求はないか。

2. 面接対象者

- i) A教授(一般教養関係3講義, 資格関係1講義, 専門関係2講義, 演習隔年)〔英語・演劇〕。
- ii) B助教授(一般教養関係1講義, 専門関係5講義, 演習1講義)〔日本史〕。
- iii) C助教授(一般教養関係6講義)〔哲学〕。
- iv) D助教授(一般教養関係6講義)〔仏文〕
- v) E助教授(一般教養関係, 講義, 専門関係 講義, 演習隔年)。

3. 一般教育について

A教授……(まったく個人の考えであるが)

現在の大学は、広い意味で昔の大学がそうであったように、研究者養成機関ではなく、教養大学である。だから厳密に、一般・専門とわける必要はないのではないか。一般、専門すべてを通して英語の力をつけさせ、文学に接するようにする。'84年度生は、いまだエンジンがかからずという感じであった。いろいろな科目をもち、それぞれ目接を定めやりがいがある。

B助教授……総合講座で「京都の歴史と文化」をテーマに、専攻の違う先生4人で分担して講義している。そのために、多くを教え込もうとはしないで、じっくり話をするということを進めている。学生にとっては、聞くことも多くて、テストも大変だと思う。京都市内のお菓子屋、針屋などの伝統産業の工場の見学会を実施したところ、予想外の人数が参加し、又、学生自身もいろいろ知っていることがわかり、学生の関心が以外に高いのに驚いた。

C・D助教授……ともに、自己の研究に関する専門課程がないので、学生とのつながりが弱い。それぞれ目的(哲学的なものの見方を人生を生きる上で身につけられるようにだとか、フランス、フランス語についてある程度知ってほしい、又、日本語の論理構造を学んでほしい。)はもっているが、学生の反応をみると満足のいくところまでいっていない。それは、決定的な修得時間不足(フランス語)や、単位修得のためということが原因にあげられる。

4. マスプロ教育について

A教授……再履習50人は語学にしては多い。英語ギライがほとんどであり、なかなか出席しない。だからこそやりがいもある。英語の力をつけるのは難しいが、興味をもたせることができた。それは、以前に行った

ロンドンのCMやポスターの文句など、生きた英語、又、マザー・ゲースのように意味でなく、音で進める英語によってである。学生は、「はじめて、英語をおもしろいと思った」という感想をもらった。

B助教授……専門では100人、一般教養では160人程の学生を相手にしているが、一般教養は授業がしにくい。

C助教授……マスプロについては、私学の限界ということがあるが、その限られた中でも、語学や一般教養ゼミナールなど、少人数教育を模索している。

5. 専門の講義について

A教授……専門の1つはほとんど一方通行、他の1つは学生自らテーマを設定させ、発表させるという形式をとっている。実際文学を読みたいという人より、英語を話したいという人が多い。①英語の具体的な力をつけることより、まず、劣等感を克服させ、その後の人生を生きていく自信をつけさせる。②外人と話すことにより、自らがかわっていく。会話をしだすと、話すことがないとダメと気づく。話す中味つまり、自分の教養の必要を感じるようになる。又、事実だけでなく、自らの意見、考えも必要になる。そのことによって、「自ら考える機会を得る。」

B助教授……Ⅰ、Ⅱ回生のうちは、広い範囲を相手にするという歴史学の特徴の中で、自分の間口を探すことを目的にしている。

Ⅲ、Ⅳ回生は、一番勉強してほしい。

C助教授……1時間に二人づつ、テキストに基いて発表させる。自分が参加するという面を出し、身につけさせる。学生にとっては、専門外ということで、どれだけ主体的であったか疑問である。一般教養ゼミナールは、大学全体の方針として、単に学科の強化のためだけではなく、研究するというスタイルを理解させることを目的としている。それは、社会にでてからも生きる

ことである。

D助教授……フランス文学については、年ごとに内容をかえている。①研究成果を伝える。②フランスの大作家の作品について語る。形式は一方通行で、学生の専門外ということもあり、学生からの質問は難しい。

6. 演習について

A教授……学生からの質問、討論参加は難しい。各学生のテーマが限定されず、共通部分をみつけ出すことは難しい。ゼミ合宿などは、Ⅳ回生英文学科全体で、夏期休暇期間中に行ない、10月の中間発表のワンストップとしている。又、夏には、英文学科を対象とした語学研修を国内、国外で開催している。

B助教授……1978年後半よりずっと受け持っている。学生の自発的な質問、討論への参加は、こちら側がよほど丁寧に誘導しなければいけない。Ⅲ回生は上回生との共通クラスで議論することがないので、質問の仕方がわからないようだ。卒論ゼミなどになると、自分で勉強しだすので一定できるが、問題点を見つけるところなど、議論を経験していないのでわからないところもある。ゼミ旅行は、Ⅲ、Ⅳ回生ともに年一回程度、コンパも年に2～3回程。

7. 研究者としての悩み

長く教育職にあり、研究者としてのスタートが遅い。小規模大学であるため運営にかかわることが多く研究時間が少ない。(A教授)授業とその準備等で、他大学に講師として出校はしていないが、1週間のうち、1日半しか実質研究時間にあてられない。(B助教授)公務その他で研究時間が少ない。研究センターの生活スタイルにできない。研究が即授業に結びつかない。(C、D助教授)。

8. 図書館への要望

8. 図書館への要望

A教授……教養大学に適した高度な専門書とやさしい入門書の間に相当するものがない。(出版物としても少ないだろうが。)教師の図書館への働きかけが少ないのも問題。どのように学生に本を読ませていくかを、教員、図書館一緒になって啓蒙活動をどう起こしていくのか。たえず考えていくことが必要。格調ある本もいいが、やさしい英語の本も入れてほしい。教養ゼミで使う本など、すべて図書館に要望していいのか迷ってしまうこともある。

B助教授……ここ数年で揃うようになった。Ⅰ～Ⅲ回生にとっては、使いがいがあっていいのでは。卒論用は、一定テーマが細分化するので50%ぐらいだが、基本的なところはおさえられている。図書が増えれば、どういふ本があって、どういふ本を読めばいいのかという図書館のガイダンスと教員のガイダンスの間に相当するものがほしい。日本史なら日本史ガイダンスといったような、史料解説のようなものを。Ⅰ～Ⅲの間に書庫(図書館)をウロウロしたか、しないかでⅣ回生時にギャップがでてくる。研究者としても日本史関係については、どの先生も自分に必要なものは、学生にも必要であると考えており、要望を出し、応えられている。図書という形でいけば揃っている。研究室の図書も、授業をしていて、ついでに揃っていくという感じである。図書館側から、学生にいかん本を利用させるか。(図書館というのは、何もしなくても利用者

が利用するところかもしれないが……。) 4年間で教養なのはしんどい面もある。Ⅰ、Ⅱ回生に対して、もっと図書館をひきつけるようなものを。(ex, エキビジョン、音読会 etc.) 図書館をひきつける導入部分を考えてほしい。(前述の日本史ガイダンスのようなもの。)

D教授……大学の予算との関係からいえば、次年度の講義用図書についての扱いかを考えてほしい。教員全体が図書館を利用させるということをしなければだめだ。特色ある蔵書づくりのためにも一年につき特定金額を教員に与え、自由に選書、購入できるようにしてほしい。

9. おわりに

大学における教育実践、の面接をする中で、改めて、大学教員の、研究と教育について考えさせられました。又、大学教員には、教員資格もなく、指導の手引きすらなく、教育実践は問われることなく研究成果のみが問われているという状況にあるということが、強く感じられました。

今回の面接には、本学の一部分の先生方にご協力をお願いしました。字数の関係ですべてのせきれていません。又、私自身の力不足もあり、面接で聞いたことを十分に書きあらわせていないことが不安でもあり残念です。

図書館で働く私としましては、この中で先生方が述べられました図書館への要望に少しでも応えていくことが、この貴重な時間をいただいた先生方へのお礼と思っています。

支部委員会から

※ 総会后、10月7日(月)に1985年度第1回支部委員会をひらきました。京都大学附属図書館の広庭基介支部長をはじめ、新役員を紹介します。

支部長	広庭基介	(京都大学附属図書館)
副支部長	堤豪範	(京都大学工学部図書室)
事務局長	竹村心	(京都大学教育学部図書室)
事務局次長	竹本文夫	(同志社大学図書館)
	大沢紀子	(京都大学教養部図書館)
財政担当	船越清美	(京都大学経済学部図書室)
会報編集員	森田富喜子	(橘女子大学図書館)
会報編集員	平元健史	(京都工芸繊維大学附属図書館)
	小平年明	(立命館大学図書館)
		(竜谷大学図書館)
研究委員長	柴田正子	(京都大学法学部図書室)
会計監査	池田千恵	(京都大学文学部図書室)
	上山千恵子	(京都大学工学部情報工学図書室)

※ 第1期「大図研学校」前期にひきつづき後期が10月12日、立命館大学末川記念館で、東京大学教授長沢雅男氏を御招きし、第1回「大学における参考調査活動」でスタートしました。第1回は前期同様約50名の参加で、申し込み数合計は67名となっています。第2回から第5回までの講義内容は次のようになっています。

第2回	参考図書の選び方	京大参考図書研究会
	11月9日(土)	末川記念会館 RN5 14:00~16:00
第3回	所在調査活動—雑誌—	大沢紀子と講義集団
	12月14日(土)	京大会館 RN211 14:00~16:00
第4回	文献検索活動—雑誌論文—	講義集団
	2月22日(土)	京大会館 RN211 14:00~16:00
第5回	ワークショップ参考調査	竹本文夫と講義集団
	3月8日(土)	京大会館 RN211 14:00~17:00

※ 原稿募集!

予定より少し遅くなりまして申しわけありません。本号を以って編集委員が交替しました。年10回は発行したいと思います。ページ数も増す予定でありますので、どしどし原稿を下さい。とくに現場からの生の声、研究成果の発表、こんな研究をしている、いややりたい等何でもけっこうです。原稿受付館は(京大・工学部)堤、(橘女子大)森田、(京都工繊大)平元となっております。よろしく!